昭和 48 年度
（1973）

厳冬期剱岳北方稜線縦走

昭和 48（1973）年 12 月 11 日～ 1 月 3 日

報告 No.2 の発刊にあたり、今から 33 年前に信州大学山岳会がオール信大 20 数名で総力をかけて行った剱岳北方稜線の厳冬期縦走を振り返ってみる。

厳冬期剱岳北方稜線は終わりました。多くの未知数的要素に不安を抱きつつも、短期間にやるべきことは済ませ、入山できました。そして、若干のつまづきがありながらも全員の努力と更に好天に恵まれ成功裏に無事終了したのです。

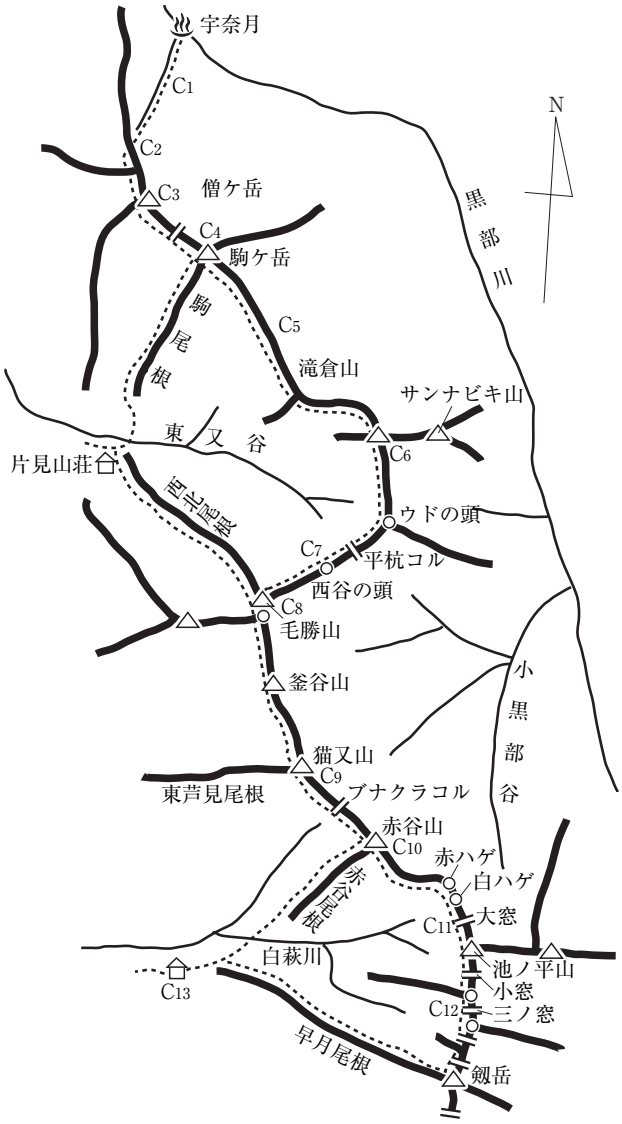
20 数名という人間が曲りなりにも一つの合宿に結集し得た事は、今後の自信へとつながることと思います。しかしながら、“十羽一からげ”にした様な所に多くの人が不満を持ち、それを抑えてきた様に感じられました。特にサポート隊が物足りなさを感じたのは、各隊独自に最終目標としてのピークハントを目指さなかったからでしょう。

春山においては各人の好みをあたため、個人山行の意義をよく生かして欲しいと思います。

今回の様な大規模な冬山あるいは合宿は当分、為されないでしょう。これからは個人山行重視の方向に傾くように思われます。部活動の流れは変わっても、我々は常に安全ということを心して活動しなければならない。山登りは未知数的要素が多ければ多いほど期待が大きく、反面、不安も大きいのです。そして、一つ一つの未知数を解決していく事が喜びであり、山登りでしか味わえない楽しみのように思います。

根底に流れる安全という事を忘れることなく、これからも多くの未知数を求めることを期待します。

CL　川口　隆



宇奈月尾根～剱岳概念図

プロローグ

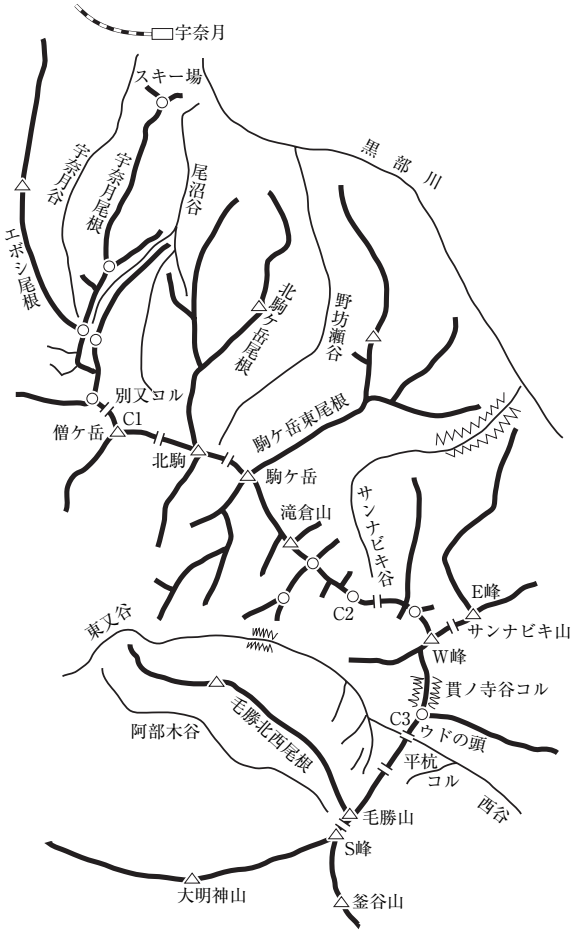
昭和45（1970）年度より、採り入れた個人山行により、活動山域は一気に広がり、ホームグランドの穂高から、各山域に足跡を残すようになった。剱岳は穂高に匹敵する山域であり、自ずと我々を虜にしていった。本山行はその集大成と言っても過言ではないだろう。本山行に至るまでの道のりを簡単に振り返ってみよう。

Ⅰ．宇奈月尾根～毛勝山 1971. 4/26～5/2

メンバー：大安徹雄（理3）、川口 隆（農2）、高橋雄治（農2）、村上純一（農2）

コース：宇奈月尾根→僧ケ岳→駒ケ岳→サンナビキ山→毛勝山ピストン→東又谷

宇奈月尾根～毛勝山（1971. 4/26～5/2）



毛勝山周辺概念図

概要：当時の報告書より「……時期的に遅いせいもあって雪がズタズタで部分的には危ない所もあったが、平杭のコルまでは何とか行けた。しかし、毛勝本峰への登りは迫力のあるものだった。ここをキスリングを背負って歩くのは、かなりきつい。やはり、北方稜線の核心は毛勝より、先であることを痛感した。今までのブッシュ混じりでなく、はっきりと岩と雪が続いている。……」

Ⅱ．剱岳定着（池ノ平BC）～剱岳北方稜線への介入 1971. 9/24～9/30

メンバー：三坂健次（農3）、高橋雄治（農2）、加賀瀬豊彦（工2）、小泉正人（農2）、伊藤直樹（農1）、田中秀和（農1）、棚橋秀顕（農1）

コース：宇奈月→阿曾原→仙人池→池ノ平BC→（八ツ峰六峰・チンネ・小黒部谷を登攀）→大窓→白萩川下山

概要：（当時の報告書の巻頭言より）「我々にとって未知の部分の多い剱岳の北側を主体として、長い尾根の登攀を行い静かな剱岳を楽しもう。剱岳北方積雪期の介入を目ざして。」

Ⅲ．白萩川～剱岳～早月尾根下山 1972. 4/26～5/2

メンバー：川口 隆（農3）、高橋雄治（農3）、三井和夫（人文3）、服部幸雄（農2）

コース：白萩川→大窓→小窓→三ノ窓→剱岳→早月尾根下山

概要：前年の川口、高橋が積雪期の剱岳へ向けて、まずは残雪期よりスタートした。

Ⅳ．北仙人尾根～剱岳　1973. 3/21～4/3

メンバー：川口 隆（農3）、高橋雄治（農3）、三井和夫（人文3）、藤松太一（教3）小川邦一（工2）、吉田秀樹（人文1）

コース：宇奈月→欅平→北仙人尾根→仙人山→池ノ平山（BC）→剱岳アタック→大窓→赤谷山→赤谷尾根下山

概要：当時の報告書より（巻頭言：1973. 7月CL川口）「剱岳山行が終り、もはや大分過去ってしまった。しかし、今もって私たちの脳裏に鮮烈な印象をこの山行は残してくれた。そして、何らかの形で各人の中に一つの糧として役立つことと期待する。参加メンバーはすでに各部においてそれぞれの位置を占め、活動している。又、海外へ出掛けようとしている者もいる。各人の心の山に今回の山行が若干なりとも役立つことを願うものです。又、これからの山岳部の一方向として厳冬期の剱岳北方稜線に注目したいと思います。剱岳はすばらしい山です。『危険と困難は区別し、危険は避け、困難には立ち向かい、これを克服せよ』と先人は言っています。困難が増せば危険も増すだろう。しかし、より困難なるものを求めたい。それがパイオニアワークであり、我々の山への情熱ではないだろうか。」

計画及び準備段階

昨年5月に大窓から剱岳の山行に始まった積雪期剱岳周辺は、3月に宇奈月から北方稜線を行きたいという夢に変わった。しかしながら、我々の実力やメンバーでは時期尚早と考え、割合長く、又トレースも比較的少ない、北仙人尾根を登路とし、池ノ平山にBCを設営後、じっくり構えて本峰をアタックすることにした。そして、11月初旬、5名にてアタック期間と下山用を含め8人11日分の食料を池ノ平小屋に荷上げした。また同時に欅平より北仙人尾根への取付を偵察し、そして池ノ平山から赤谷山迄3名にてトレースした。……

全員を代表して（新人の時の吉田君）

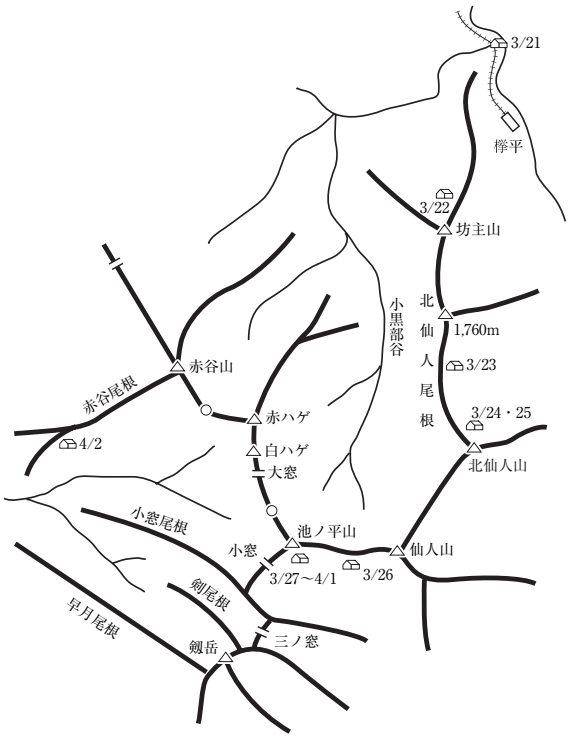
“剱岳”――何かしら独特の響きを持っているように感じる。ドカ雪、悪天 etc. 他の山域とは違う何かを実際に見てみようと入山前の期待は大きかった。剱岳のピークは踏めないにしても充分面白いと思われた。（実際思った以上に面白かったのであるが）……ところで、やはり春山も荒れれば冬山並みになると言われるが春山は春山。気分が良くなりますね。春に荒れるといっても冬型になる時はきびしいが日本海低気圧による時は全く寒さがきびしくないのです。下山の途中には黒々とした大地が顔を出しており、春山の楽しみというのもこんな所にあるのでしょうか。……

心残り

①BCで写真を撮ってもらいたかった。

②赤谷尾根で大窓、小窓、三ノ窓を見たかった。

③剱岳のピークを踏めなかった。（一年目だもんね）



北仙人尾根概念図

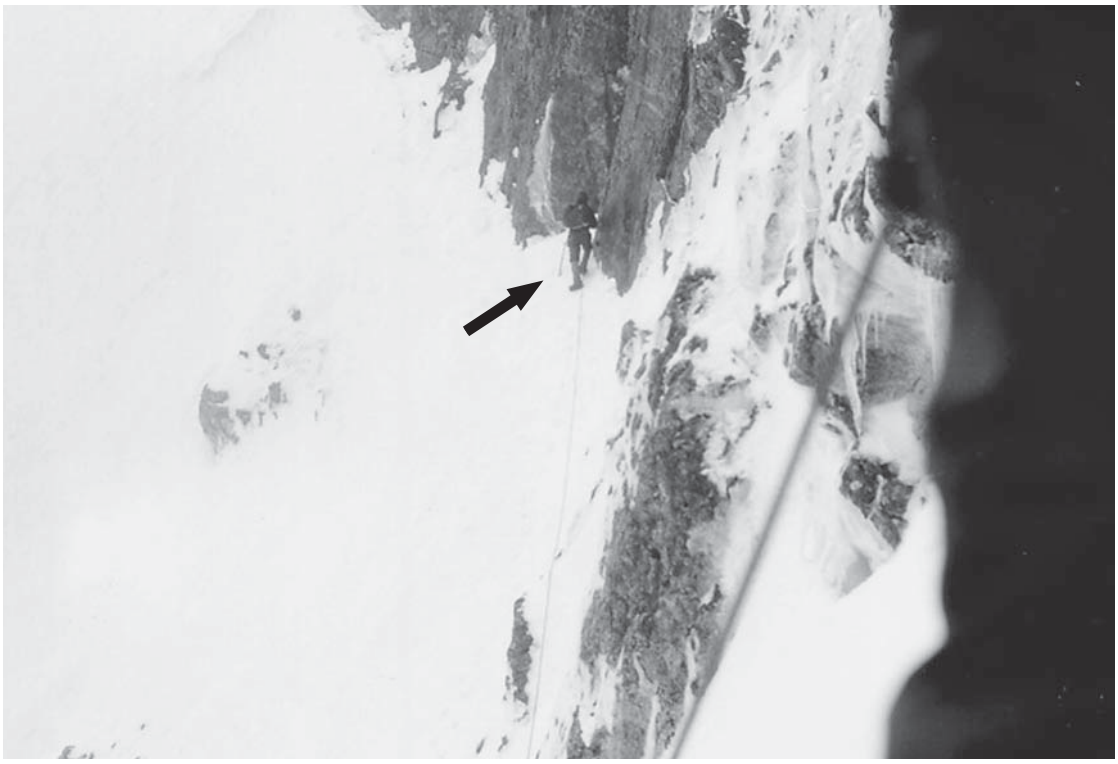
●魚津にて　吉田・小川・三井・川口・藤松・高橋

●池ノ平山より八ツ峰・チンネ・剱岳

Ⅴ．毛勝～赤谷山　1973. 5/1 ～ 5/6

メンバー：大安徹雄（理 5)、臼井　武（人文 4)、
　服部幸雄（農 3)、北岡政弘（農 2)
コース：東又谷→毛勝山→猫又山→赤谷山→赤谷
　尾根下山

●北仙人尾根上巨大雪屁を乗越える（写真提供：藤松太一）



●氷化した三ノ窓を通過する川口（写真提供：藤松太一）

1973年12月11日～1974年1月3日（縦走隊）
12月11日～12月21日（僧ケ岳隊）
12月13日～12月27日（毛勝隊）
12月17日～12月29日（赤谷隊）

隊編成

①縦走隊：宇奈月尾根～剱岳の縦走
②僧ケ岳サポート隊：宇奈月～駒ケ岳までのサポート～駒尾根下山
③毛勝山サポート隊：西北尾根～毛勝山へのサポート・天国の坂道にルート工作
④赤谷山サポート隊：赤谷尾根～赤谷山へのサポート

参加メンバー

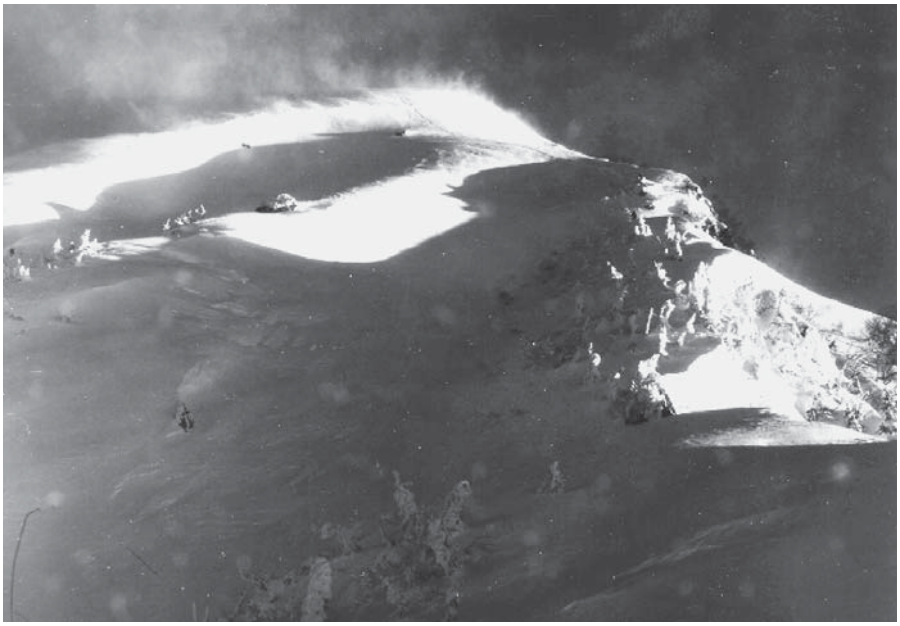
縦走隊（4名）：川口　隆（農4）　藤松太一（教4；風邪のため赤谷山まで）
西川義満（工3；下山後手足の指を数本凍傷で落とす）
吉田秀樹（人文2；毛勝山まで）　古川道裕（工2；毛勝～赤谷山まで）
加賀瀬豊彦（工4；赤谷山～剱岳）　服部幸雄（農3；赤谷山～剱岳）
僧ケ岳隊（6名）：大安徹雄（理5）　北沢茂俊（教3）　北岡政弘（農2）　小林　明（繊維1）
斉藤吉盛（農1）　豊田信行（農1）
毛勝隊（8名）：三井和夫（人文4）　臼井　武（人文4）　中田　茂（人文4）　尾崎一紀（工2）
古川道裕（工2）　川瀬　亨（工1）　須貝与志明（農1）　古橋孝夫（農1）
赤谷隊（9名）：加賀瀬豊彦（工4）　三坂健次（農5）　小川邦一（工3）　服部幸雄（農3）
福島　渉（農2；故人）　牧瀬敏裕（農2）　加藤明夫（農1）　宅和正彦（工1）　横山勝治（工1）

行動記録

	縦走隊	僧ケ岳隊	毛勝隊	赤谷隊
12/11 快晴	宇奈月温泉→スキー場→宇奈月尾根1100mTS			
12/12 快晴～ 風雪	・川口、大安、北沢、西川、吉田、斉藤：TS→1150m避難小屋→1580mTS ・藤松、北岡、小林、豊田:TS→スキー場（デポ回収）→1580mTS			
12/13 吹雪	TS→前僧ケ岳→別又乗越→僧ケ岳直下TS		魚津→東蔵→片貝山荘	
12/14 風雪	・川口、大安、西川、北岡、豊田：北駒～駒ケ岳コルまで荷上げ ・藤松、北沢、吉田、小林、斉藤：1580mTSのデポ回収		山荘→東蔵→山荘 デポ回収、西北尾根取付点偵察	

	縦走隊	僧ケ岳隊	毛勝隊	赤谷隊
12/15	風雪のため休養も兼ね沈殿		山荘→西北尾根 1400m デポ→山荘	
12/16 風雪	TS →北駒ケ岳→駒ケ岳ピークに TS		山荘→ 1400mTS	
12/17 吹雪	駒ケ岳 TS →最低コル→ 1730mTS	縦走隊を見送り沈殿	TS →西北尾根 1700m へ荷上げ→ TS	魚津→上市→伊折→北電避難小屋
12/18 曇り	TS → 1800 m ピーク→サンナビキ山 TS	TS →駒尾根下山→ 1400mTS	TS → 2000m 地点 TS	避難小屋→伊折デポ回収→馬場島 TS
12/19 吹雪	吹雪沈殿	待機	TS → 1700m デポ回収→ TS	沈殿

● 30kg の荷を背負い宇奈月尾根より入山（写真提供；藤松太一）



●毛勝から猫又山を望む（写真提供；藤松太一）

●豪雪にあえぐ縦走隊　西川・吉田・川口（写真提供；藤松太一）

	縦走隊	僧ケ岳隊	毛勝隊	赤谷隊
12/20 曇り～ 快晴	TS →ウドのコル→ウドの頭→平杭コル→西谷の頭 TS	他パーティとの調整のため待機	TS →毛勝山 TS 「天国の坂道」のルート工作するも縦走隊と歩調合わず	馬場島 TS →赤谷尾根 1400m → 1560m ピーク TS
12/21 晴→ 吹雪	TS →毛勝山 TS サポート隊と合流	下山：片貝山荘→魚津→松本	縦走隊をサポート、フィックス回収→下山予定を義理と人情で留まる（天候悪化、病人）	TS →馬場島デポ回収→ TS
12/22 吹雪	沈殿		沈殿（古橋高熱重症）	沈殿
12/23 吹雪	毛勝山 TS → 西北尾根 2200m → 毛勝山 TS サポート隊をサポートして 2200m へ		古橋の容態悪化し歩くこともままならぬエッセン切れ、縦走隊に助けられて 2200m 地点 TS	沈殿 朝の会話：K「カビが生えるゾー」、O「もう生えてる。股の所に」、M「キノコも生えてる」

●赤谷山で合流した縦走隊とサポート隊
「赤谷山」を「赤短山」ともじり、「あかよろし」で出迎えた三坂らしいユーモアであった。
後列；小川、加藤、川口、服部、藤松、加賀瀬、三坂
前列；横山、福島、牧瀬、西川、宅和

	縦走隊	僧ケ岳隊	毛勝隊	赤谷隊
12/24 吹雪	クリスマス寒波で身動きできず沈殿		再三デポ回収を試みるが失敗。遂にピンチフードに手をつける	沈殿
12/25 雪	藤松風邪気味のため沈殿		2200mTS → 1500mTS まで下山。デポ回収し、食い狂う。	1560m ピーク TS → 2000m へ荷上げ→ TS
12/26 快晴	TS →釜谷山→猫又山→ 1950m 地点 TS		TS →片貝山荘（久しぶりに畳の上で寝る）	TS →デポ地→赤谷山ピーク TS
12/27 快晴	TS →ブナクラコル→ 赤谷山 TS サポート隊の歓迎を受ける		山荘→魚津→解散	縦走隊出迎え、歓迎、歓迎
12/28 吹雪	赤谷山 TS →赤ハゲ→ 大窓雪洞			赤谷山 TS →下山→ 馬場島
12/29 吹雪	吹雪、沈殿			馬場島→伊折 三坂、小川、福島、牧瀬は縦走隊の下山に備え待機
12/30	吹雪、沈殿			
12/31 曇り	大窓→池ノ平山→小窓→ 三ノ窓 TS			
1/1	曇り時々晴れだったが元旦の混雑を避けて沈殿（さすが信大！）			
1/2 快晴	三ノ窓 TS →剱岳→早月尾根→馬場島			縦走隊を鏡餅（雪製）で迎える
1/3 曇り	馬場島→伊折→上市			馬場島→伊折→上市

核心部の記録（当時の報告書より、記：西川）

12 月 28 日　地吹雪

赤谷山 TS7：40 → 9：00 赤ハゲ→ 11：30 大窓

　赤谷山で藤松、古川に代わって加賀瀬、服部が縦走メンバーとなる。出発した時は曇り空であったが、白萩山辺りまで行くと吹きはじめ、赤ハゲでは目も開けていられない程の猛烈さとなる。エビのシッポが顔にあたって痛くてたまらん。雪洞を掘ろうとするが適当な場所が見つからず、大窓まで行くことにする。白ハゲを経て大窓までの間は要所に法大のものと思われるフィックスロープがあり、がっかりするやらためらうようなポーズを一応はとってみるが、結局は安易に走り使用させていただく。大窓では北の端に風の強そうで吹

きだまらない所に雪洞を掘る。

12月31日　曇り

大窓 TS7：15→8：30 岩峰手前→9：30 池ノ平山手前のコル→13：20 小窓→15：50 小窓尾根→16：45 三ノ窓 TS

風は強く寒さも厳しいが比較的よい天気である。大窓の頭までの急登はアイゼンが効いてスムーズに行ける。頭に法大のテントがあり、ここから先も彼らのフィックスが要所にあり、何のためらいもなく使わせてもらう。岩峰は小黒部側を巻いて行く。池ノ平山の登り口で先行の法大がルート工作をしているのにぶつかり、コルにあった雪洞に入って時間待ちをする。結局、小窓まで彼らのフィックスを使用。小窓尾根の登りにも4人の先行パーティがあり、最初の半分だけラッセルせずにすむ。すぐに追いついてしまい、あとは一緒になって胸までの雪にトンネルを掘るようにして尾根に飛び出す。逃げるようにして三ノ窓に入る。小窓王のトラバースは溝のようなトレースがあり、ザイルは使用せず。ジャンダルムの下に設営。

1月1日　曇り時々晴れ

昨夜は除夜の鐘までねばったため、元旦は10時まで寝てしまう。元旦のピークは混雑が予想されるので今日は行かない。

1月2日　快晴

三ノ窓 TS7：30→9：30～10：10 剱岳本峰→早月尾根→15：00 馬場島

一日待った甲斐あって今日はフィナーレを飾るにふさわしい好天。池ノ谷ガリーは雪が少なくアイゼンが良く効く。主稜には消えかかったトレースが残っており2時間で本峰に着く。ゆっくり休んでから、早月尾根を下降。2,000m 付近でアイゼンをはずし、立派なトレースを滑ったり、転んだりして馬場島へ下る。馬場島で待機してくれていた4名と雪製のカガミモチに迎えられて久しぶりに広々としたテントに入る。

エピローグ

CL の巻頭言にもあるように全員の努力と好天等にも恵まれ、無事大成功裏に終わった。しかし、実際には、各部員の物足りなさ（特にサポート隊）や上級生に対する不満、冬山に対して持っていた印象とのギャップより生じる疑問が多々露見した。

結局、「個」と「組織」の問題になる訳だが、いつの時代も、どの社会でも生じる問題であり、未だに解決出来ずに各人が引きずっている問題ではなかろうか？

下山後の雑感を披露してその辺りにふれてみよう。

「剱岳合宿を終えて下で思ったことなど……」

Jan. 14　三坂健次（赤谷 P、農5）

意外にあっけなく計画は成されてしまった。（スゴイ！）はじめ、それは、とても我々には大きすぎると思われた。おそらく、それは未知の不可能要素の出現によって成し得ないだろうとさえ思われた。しかし、ふたをあけてみれば、そんな懸念とはうらはらに我がザツさにもかかわらず、結局あっさり成された（ように思う）。俺の見込み違いはどこにあったのか？　俺の認識は SAC を過少に見なしていたのか？　それとも、山ってやつはもっと甘く見てもよいものなのだろうか？　まだ赤谷山サポート隊のことしか実際を知らない段階なのでそれについてだけ述べるなら、結果として、何のための山行だったのか理解に苦しむ。（事前に全員がこの計画について、あるいは各自の立場についてどれほど認識していたのかも知らないが）サポートという仕事はルート工作がほとんど不要だったことで、半ば無に等しく、赤短山ハイキングの感はぬぐいきれない。楽であることの本当の有難さはみんなよく知っていても、あんなに予想外に快適で安穏な冬山を経験するとちょっと考えてしまう。それは一体良かったのか悪かったのか？　悪いなら何が悪いのか？　この時季には剱岳さえもが、もはや俺達だけの力でやる山行を

許さないのか？（俺自身この時季を選んだ一人だが）ともあれ目標は達成されたし、全員無事下山できたし、新年会はめでたくやりたい。本質さえ見失わなければどんな山行だって価値はある。

川口君へ（個人書簡です；時効）

新年は山の中で迎えたけれど、やはり街へおりてこないとその気にはならないもののようです。改めて、あけましておめでとう。今度の山行の成功は一口に言って君のリーダーシップの素晴らしさにあるといっていいと思う。乗り気でない俺なんかも含めてよく全員の力をまとめられた。厳冬期の剱岳があの程度だとは今も思えないけれど、その幸運を差し引いても充分な成果だったのではないだろうか。俺達の代に足踏みを続けていたSIMACも君達のもとにようやく歩きはじめた。この先も「心」を大切にするうちの部のよさを更に育てていってほしい。……

「冬山合宿の思い出」　Jan. 16　藤松太一（縦走隊　教4）

計画当初今回の冬山合宿のスケールの大きさに我々は無事山行が終了するであろうかなどと思っていた。折も折、11月に友を山で亡くしあまり強い自分ではなかった。しかし、山へ帰り雪を見て、雪にトレースをつけてゆけば今までの自分の姿がそこにあった。……赤谷山を前にし風邪などひきこみ熱が出、食欲不調。絶望的な状態におちいり結局は赤谷山で縦走隊と別れた。剱岳を前にして……しかし、自分の心の中には何らかの安堵感があったのも否定できない。我々以外、誰もいない世界、卒業の山行としては実に充実しており、今思えば満足であった。3年生はもとより下級生も今回の山行を土台にし、今トレッキングに行っているユウジ（高橋雄治）やナベ（渡部光則）らの夢を胸のうちに持ち、しっかりした技術を自分のものにして、n年間の山岳部生活を送ってほしい。また一回の山行で自分を駄目などと思わないでほしい。

「冬山感想」　小川邦一（赤谷P　工3）

今年の冬山も終わった。大きな計画であったにもかかわらず、なんとなくあっけなく終わってしまった気がする。計画も良かった、力量も揃っていたのだろう、天気もどちらかといえば、良かったみたいだし、しかし、今回の成功を手放しで心の底から喜べない何かがある。それは不満と呼ぶものなのだろうか。人数が多くなれば全員の満足する山行をやるのは確かに不可能に違いない。これは仕方のないことなのだろう。

赤谷尾根隊は「あかよろし」の旗をひらめかせ、最初で少しつまずきこそすれ、終始乱れた雰囲気の中で真にうまく行動を行い、よくやったと思う。何が本当なのか分からないが、これも本当ではないかと思う。皆さん、明大の方に感謝しましょう。（注；赤谷尾根はほとんど明大のフィックスを使用）

「冬山反省文」　北岡政弘（僧ケ岳P　農2）

今回の冬山は非常に短かった。我々、僧ケ岳Pとしては少々、物足りなかった。……
少々、縦走隊をたてすぎた感がある。一番大切なことが抜けていたのではなかろうか。一つのことを「皆で協力してやり遂げよう」はよいのであるが、しかし、「皆で同じ様に苦労して」と下に続くはずである。……

「冬山反省文」　豊田信行（僧ケ岳P　農1）

今回の山行は、初めての冬山であり、その規模、計画などどれもびっくりした。でも、僕自身にとってみれば物足りなかった。確かに行動中はいつもバテバテであったし、随分、利己的であったと思うけど、下山してからも、いや山行中ですら、もっと山へ行くことを望んでいた。組織的に行われる山であるなら、仕方のないものであったにしても、「僕等がいなければ、縦走隊は動けなかった」といくら言われてみたところで、所詮、山というものは、個人にどう働くかが問題となるものであるから。これは、大規模な山行をするなら仕方のな

い面かもしれない。これは夏の合宿の時も程度の差こそあれ、思ったものであった。とにかく、今思うことは、春は、このような山行はやりたくない。思う存分、山へ入り、山を歩いてみたい。そう思っている。……

「無題」　古橋孝夫（毛勝Ｐ　農1）

今回が私にとって初めての冬山の経験になりましたが、何から何までが、今、下界で思うと「冬山……」と考えさせられます。即ち、私にとって、この冬山はあまりにも印象が深すぎたのです。いや、所詮、冬山とはこんなものかもしれないし、私がまだ山というものを理解できていない現われかもしれない。私は風邪をひき、熱を出しました。

このことに関し、他のメンバーに多大の苦労をかけたこと、特にサポート隊である私が縦走隊の人々に苦労をかけたことは実にすまないことと思います。そして、体調の悪化とともに悪いことは重なるのか、毛勝のピークであり、外は強風、吹雪でした。そのようなことが合わさって精神的には、口で言えないほどの疲労とあせりを感じ、肉体、精神の両面のダブルパンチを食ったわけです。「死」というものを生まれてはじめて身近に感じたのです。そしてそのため、他力本願に陥り、ものすごく内心あがいていました。この山行において私は私の本当の姿を見た気がしました。実に弱い精神力を……

話は別になりますが、今回はパーティ、リーダー、メンバーシップ etc を強く考えさせられました。……

こうやって、我々はいつも議論を戦わせ、真剣に大学山岳部について、山登りについて、考えていた。いい時代であった。

「個」と「組織」の問題は常に我々を悩ませたし、部を去っていった者もたくさんいた。

巻頭言で CL が言っているように、これ以降このような大規模な山行は為されなかった。「個」の時代の到来であった。しかし、我々はこの問題を本当に解決し終えたのであろうか？

●ハクサンフウロ